

平成29年度第2回 新潟市美術館及び新潟市新津美術館協議会 議事録要旨

日 時 平成30年2月14日(水) 午後2時から4時

会 場 新潟市美術館 講堂

出席者

(委員) 会 長	中山 輝也	新潟県博物館協議会会長
	大倉 宏	美術評論家
	金山 喜昭	法政大学キャリアデザイン学部教授
	佐藤 靖子	新潟市立中野小屋中学校校長
副会長	菅井 柳翠	書人
	建畠 哲	多摩美術大学学長
	東村 里恵子	フリーアナウンサー
	福永 治	広島市現代美術館館長
	降旗 千賀子	目黒区美術館学芸係長
	岩城 文夫	公募委員
	渡辺 千代子	公募委員

(事務局)

	塩田 純一	新潟市美術館館長
	高橋 剛	同 副館長
	松沢 寿重	同 課長補佐(学芸員)
	高橋 良子	同 総務係長
	荒井 直美	同 学芸係長(学芸員)
	横山 秀樹	新津美術館館長
	新井田 均	同 副館長
	大森 慎子	同 主幹(学芸員)

次 第

- 1 部長挨拶 文化スポーツ部長 中野 力
- 2 開会挨拶 新津美術館館長 横山 秀樹
- 3 議事
(1) 新潟市美術館及び新津美術館 平成30年度事業計画について
(2) その他
- 4 その他
- 5 閉会挨拶 新潟市美術館館長 塩田 純一

1 部長挨拶

(中野部長)

本日は、平成 30 年度の事業計画を中心にご審議いただく。来年度予算については昨日市長が記者会見で発表した。以前から報道されているとおり、新潟市は行財政改革を進めており、来年度の予算編成は大変厳しいものとなっている。ただ来年、2019 年の 1 月 1 日は新潟港開港 150 周年の日に当たるため、来年の 7 月から 2019 年の年末までの 1 年半ぐらいの期間、開港 150 周年の記念事業をやる。7 月 14 日から海フェスタ、また同日から、4 回目になる水と土の芸術祭を 10 月 8 日まで開催する予定である。本日の議事の中でお示しする展覧会の中にも冠事業もあるが、今年度このような冠事業をたくさん行うことで、文化、芸術が有する創造性を活かしたまちづくりを進めていきたいと考えている。

また今、^{ビョンチャン}平昌オリンピックが開催中だが、新潟市で、ロシアのフィギュアスケートのチームが合宿した。2020 年の東京オリンピック、パラリンピックに向け、合宿の誘致も進めていく予定である。さらに、文化プログラムについては、新潟市ではアーツカウンシルを設立しており、食文化、市の伝統芸能や暮らしなど多様な文化の発信に力を入れていきたい。

美術館については、塩田館長、横山館長の両館長の下でそれぞれの特色を生かした展示などをし、市民に親しまれる美術館を目指している。今日のご審議を通じて、今後の 2 館のあるべき姿や方向性について皆さまから忌憚のないご意見をいただき、よりよい美術館を目指していきたい。

2 開会挨拶

(横山館長)

今回は平成 30 年度の事業計画についてご審議いただく。忌憚のないご意見をいただきたい。

3 議事

(中山会長)

この協議会は両美術館をより良い方向に導くために立ち上げたものである。来年度は新潟市の財政が厳しい状況の中、大きな行事が 2 つ重なっている。そういう中で両館とも相当の知恵を絞って取り組んでいるのではないかと楽しみにしている。今回通算で 12 回目と聞いた。この協議会がきちんと機能していくことを祈念する。

それでは皆さまの活発な発言をお願いします。

事務局より資料1、資料2及びパワーポイントの画像に沿って、新潟市美術館の平成30年度の事業計画について説明。

続いて、事務局より資料3、資料4及びパワーポイントの画像に沿って、新津美術館の平成30年度の事業計画について説明。

(建畠委員)

新潟市美術館の拡大コレクション展に「正誤表」というユニークなタイトルが付いているが、具体的にはどういう意味か。

(荒井係長)

まず、「正誤表」という名前について。図録などに差し挟む正誤表は、何ページの何々が間違っていてこれに正しますというものだが、正誤表は正しいことを伝えるものでありながら、複数の版が存在したり、その都度更新されたり、極めて不安定なものだと私もは考えている。何が正しくて何が間違っているというのは歴史が決めるところもあり、美術館で展示されているものも、いつでもそうした更新ができる相対的なものではないかという、仮定に基づいた展示を行いたいと考えている。

今予定している展示は、ワークショップと絡めて、中学校などの協力をいただき、生徒に自分や他人の大切なものを持ち寄ってもらい、それに美術館がやるようなキャプションをつけて展示をする。展示の方法を体験してもらおう。あるいは、これはどのくらい実現できるか分からないが、当館のコレクションの貸出実績やお客さまの人気を調査しながら、それと作品の歴史的な位置付けがマッチしているのかを考えてもらいながら見ていただく展示を予定している。

具体的に何を展示するかはまだ構想段階だが、予算も少ない中、そうした手作りの、自館の所蔵品も生かす展示を考えている。

(佐藤委員)

新津美術館の、鉄道資料館や県立植物園との連携事業が非常に良い。最近新幹線に乗ると、「私を新幹線でスキーに連れてって」という、三上博史と原田知世の「私をスキーに連れてって」を使った宣伝があり、そういう世代を巻き込む戦略をJRはかなり頑張っていると思う。例えば、山手線の車両は新津で作られている。水と土の芸術祭で拝見した「培養都市」という作品を新潟市美術館が所蔵するということが、新潟の信濃川の発電所から送電線で電力を送って、東京の山手線を動かしているとい

う、そういう芸術と電車と美術館のコラボで何とか集客できないか。前回は、新しい新潟駅に何か観光案内のスペースはあるのかと質問したが、そういうPRの戦略も考えてもらいたい。

(中山会長)

なかなかいいアイデアではないか。

(金山委員)

新潟市美術館のコレクション展はテーマがそれぞれ付いているが、「2017年コレクション展Ⅰ」というふうに、その年の年数を入れると、コレクション展をずっと並べていったときにメリハリができるのではないか。

新津美術館について質問だが、今、日本の博物館や美術館の大きな問題の一つに施設の老朽化があるが、今回、足立美術館のコレクションを借りるときに、横山大観など貴重な資料を一時的に保管し、展示をする環境に心配はないか。

(横山館長)

新津美術館は開館して20年経つが、老朽化したところはその都度直しており、リニューアルはまだ考えていない。環境については、今年度、興福寺の展覧会で国宝・重文を展示したときに、施設についてのいろいろなデータを東京文化財研究所を経由して文化庁に送っており、今の段階においてはクリアしていると考えている。

(金山委員)

文化庁の指定する文化財を展示できる美術館になっているか。

(横山館長)

公開承認施設にはなっていないため、一回一回申請する。

(金山委員)

今後、公開承認施設になる予定はあるか。

(横山館長)

公開承認施設は5年間に3回以上国宝重文を展示する必要があるが、平成30年度は国宝・重文を借りる予定はなく、その次についてはまた協議をする。

(金山委員)

新潟市美術館は公開承認施設になっているか。

(塩田館長)

なっていない。

(大倉委員)

企画展、常設展、それぞれにユニークな内容である。企画展のラインナップを見て、学芸員の独自の調査研究に基づいた企画展は新潟市美術館の阿部展也展だけで、それ以外はある程度集客を見込める展覧会を考えたと思うし、遠くの人に美術館に足を運んでもらう、親しんでもらうという点では、そういう企画も大事だと思うが、菅井委員と私が当初から言っているのは、やはり新潟市の美術館として、新潟地域でこれまで活躍された方や、現在活躍されている方など、私たちが身近に接している人たちの美術作品の紹介も、企画展あるいは常設展の中でもう少し積極的にやってもらいたいということだ。

その一つとして、新津美術館がこれまで開催してきた「各区の隠れた名品展」が、一段落したということかもしれないが、今回なくなっていて、それに代わる、地域の美術を紹介する企画展が1つぐらいあってもいいと感じている。来年度はもうすでに決まっていると思うが、その次の年度など、学芸員の力量も発揮されると思うので、もう少し足元に目を向ける企画を両館とも考えてもらいたい。

(菅井副会長)

私は大学を卒業してから、美術館をつくるのに大いに頑張った。当時、あちこちに美術館をつくらうという運動があったが、そういうこともあってこの美術館ができ、ここまでやってきた。次は、今、大倉委員が言ったように、何年か前に地元作家を取り上げた展覧会をやったが、おそらく学芸員も大変だったと思うが、そういう展覧会もたまにやってもらいたい。

それからもう一つは、水と土の芸術祭との関係をどうするか。ご存知のとおり、水と土のカビ・クモ問題からこういう美術館の組織・体制のあり方の問題が起きたわけで、前からこういう会議があることも知っていた。その水と土の芸術祭が今も続いているわけだが、これと市民との接点をどう持っていくかというのは、大変なことだと思う。市民の理解と協力をいただいて、計画をして、より良い方向に持って行っていただきたい。またクモが出たなんていうことにならないようお願いしたい。

(中山会長)

水と土の芸術祭とこの美術館との関係がよく分からない委員もいると思うので、説明してほしい。

(塩田館長)

水と土の芸術祭は新潟市で3年ごとに開催されている。2009年の第1回のときに新

潟市美術館、新津美術館や各区のさまざまな場所を展示スペースとして活用して開催された。そのときに新潟市美術館で展示した作品にカビが生えた。また、別の展覧会の作品からクモが出た。それに対してメディアから問題があると批判されるなど、その後も尾を引いた。その後の2011年に私が着任した。水と土の芸術祭は、2012年、2015年、そして今年2018年に第4回目が開かれる。

私は現代美術が専門ということもあり、新潟市から水と土の芸術祭に関わってほしいという話があった。当館ではかなり前からこの時期に阿部展也展をやることが決まっていたため芸術祭の会場になっていないが、ここから近い旧二葉中学校がサテライト会場になっており、また、砂丘館をはじめ近くの様々な文化施設で展示が行われる。メイン会場は旧水揚げ場（万代島地区）の「大かま」である。

当館では、水と土の芸術祭との連携ということで、海の庭と山の庭に、現代陶芸の作品を展示する予定である。

また、この時期のコレクション展は、現代美術や、これまでの水と土の芸術祭に出品した作家、先ほど佐藤委員から吉原さんの送電線の作品のご紹介があったが、そういう関連作家の作品の展示を予定している。しかし、館内の展示室で、今回の水土の出品作家の作品を展示するということはない。

（中山会長）

水と土の芸術祭とは直接関係はないということ。

（塩田館長）

はい。ただ、私自身が水と土の芸術祭のアートディレクターとして関わっている。私のこれまでのいろいろな経験がお役に立てばという気持ちである。

（中山会長）

第1回目の水と土の芸術祭のとき、この協議会が終わった後で、展示作業を見学した。土を搬入していて、少し危ないと思った記憶がある。今回の芸術祭とは関係ないということで、よいことだと思う。

（渡辺委員）

美術館と報道各社との連携を今後も期待したい。

新津美術館の資料4の2の企画展「ぼのぼの原画展」について。ほかの展覧会名には横山大観など作家の名前が載っている。「ぼのぼの原画展」は、いがらしみきおさんの4コマ漫画「ぼのぼの」ということだが、展覧会名に作者の名前を出さないのか。

（横山館長）

巡回展のため、巡回を組んだところがこの展覧会名を付けている。

(渡辺委員)

今後はいがらしみきおさんという名前は載せるつもりはないのか。

(横山館長)

サブタイトルにはあったほうがよいと考えている。

(渡辺委員)

あった方がよいと思う。漫画家のいがらしみきおさんということが載れば、少しは集客につながるのではないかと思う。ぜひ検討してほしい。

(岩城委員)

ピカソの版画展で、原画との関連を出すという展示の仕方は面白そうだった。今年度の写真展は、いつどこでどういうふうに撮ったのかという説明が作品についていたらもっとよいと思ったので、展示の仕方をいろいろ考えてほしい。

私は今回の資料を見て、小倉遊亀、阿部展也、リサ・ラーソン、エドワード・ゴッリーを知らなかったので、インターネットで調べて、それぞれ面白そうだった。逆に言うと一般市民は大体そのぐらいの感覚である。これからどういうかたちでそれぞれの展覧会をアピールしていくのか。どれも個性的で面白そうなので、それをぜひアピールしてもらいたい。

それから、前年度と比べてどのくらい予算が減っているのか、お聞きしたい。

(高橋副館長)

今回の協議会のご意見等も踏まえて、これから、市議会の文教経済常任委員会で説明する。現段階ではまだ議案の段階だが、新潟市美術館については、一般的な経費は1億930万円ほどで、約1,600万円ほどの減である。企画展が今年度の5本から来年度は4本になることと、全市的な経費削減ということで、管理経費等で切り詰められるものは切り詰め、事業の取捨選択等を行い、1,600万円ほど圧縮した。

(塩田館長)

数字だけ聞くとずいぶん予算があるように受け取られるかもしれないが、大部分は空調など館全体の管理経費である。展覧会の経費は、実際の真水としては、本当に数百万である。コストのかからない展覧会を、しかもある程度集客力がありそうなものを選んで、そして市の経費だけではなく、実行委員会を組んで地元のメディアに出していただくことで何とか成り立たせている。実は美術館の経費では削るところがなく、開館時間を短縮しないとやっていけないというところまで来ている。今は具体

的な数字はお示しできないが、そういう状況にあることをご理解いただきたい。

(中山会長)

新津美術館はどうか。

(新井田副館長)

似たようなことが言える。企画展は例年5本を基本にやってきたが、事業の廃止・休止の検討ということで、考えた結果、来年度は1本減らして4本にした。企画展の予算が400～500万円ぐらい減った分で予算を縮減したかたちだが、やはり企画展が1本減れば、それだけ楽しんでいただく機会も開館日数も減るので、美術館としては非常に厳しい。

(横山館長)

先ほどの大倉委員への回答も関わるが、資料3の表を見ていただくと、企画展を4本に減らしたかわりに、一つひとつの展覧会の会期を長くして補っている。空いている12月は施設整備に充てる予定である。

(降旗委員)

新潟市美術館も新津美術館も本当に苦労していると思う。私どもの目黒区美術館も同じような状況である。そういう中でいろいろ考えられたラインナップだと思う。

特に新潟市美術館のコレクション展はいつもテーマの設定が面白い。非常にユニークで大変いいコレクションを持っているので、いろいろな形での展開ができるのだと思う。拡大コレクション展も非常に興味がある。

企画展は1つの美術館からまとめて借りることで経費の削減ができる。そういったことで集客に結び付くのはやはり重要なことと思う。阿部展也展については、きちっとした調査と非常によいコレクションがあり、福永委員の広島市現代美術館と埼玉県立近代美術館の骨のある学芸員が集まって企画しているので、大変楽しみである。

昨年の「石川直樹展」、その前の「アナタにツナガル」展は、テーマ設定も非常に面白かったので、そういう現代美術の展覧会をこの先も続けてもらいたい。

新津美術館の横山大観の展覧会は、きっと横山館長の方で可能になったと思うし、ぼのぼの原画展も新津美術館のカラーを出していると思う。

教育普及活動について、新潟市美術館のARTTRIP（アートルリップ）が大変順調に成果が出てきていると聞いた。ラウンジNの企画も結構面白い。あとは、子どもをベースとして大人と混ぜ合わせてやる企画や、子どもに対するダイナミックな企画が必要だと思う。それは新津美術館も同じである。

私どもの目黒区美術館は開館 30 年で、子どものワークショップをずっとやってきたが、今、成長した子どもたちが講師になって新しい世代に教えるという循環が行われている。年数を経るとそういう効果も得られて、予算がないときには非常に助かる。そういうことも考えていただきたい。

(中山会長)

荒井学芸員は今のお話についてどうか。

(荒井学芸員)

非常に心強いお言葉をいただいた。当館の子どものワークショップは、親子参加の場合、そのまま家族単位でグループ分け、ということが多いので、その辺を変えるだけでもかなり変わるのではというご意見も出たので、そういった試みにも挑戦していきたい。

(福永委員)

地方美術館の予算は非常に厳しい状況にある。規模は様々なので厳しさを比べあってもしょうがないが、さきほど塩田館長が約 1 億 900 万円でこの館を全部運営しているとおっしゃったが、新潟市美術館と同規模のわが館は年間 3 億円の予算でやっているがそれでも厳しい状況である。企画展が 5 本から 4 本になっていたのも、相当苦勞していると思った。数年前から放送局と実行委員会を組むという形式で市の予算を節約していて、今回展覧会の数を減らしたのは、もうかなり限界にきているのではないか。

新津美術館の横山大観の展覧会は大体が日本画なので、展示期間は 6 週ぐらいに制限される。小倉遊亀は多分ご配慮があり 8 週という会期になったと思うが、展覧会の数が少なくなると、相当厳しい状況になるのは自明の理である。そこで収入を少しでも上げるために他館のコレクションを借りる工夫をしながら、両館ともかなり苦勞してラインナップを決めたと思う。これ以上予算が減ると多分成り立たない。さっき塩田館長が言ったように、開館日数や時間までも影響してくるという懸念を持つので、ぜひとも市で支えてもらいたいと部長にお願いしたい。

二つ目は、大倉委員や菅井委員が言ったように、地元の作家をどう扱うかは地方美術館にとっては非常に大きな課題である。言うは易いが、それを反映することはなかなかできない。十分できている館があるかというとなかなか難しいと思う。しかし外から見ると、新潟市美術館は現代美術と新潟市の作家のグループ展や、亡くなった画学生の日本画の展覧会をして、本当に新潟らしいカラーが出ていると思う。もちろん

これから先も学芸員は地元に着してやらないといけないというのは大事なことで心がけてもらいたいが、今のところ十分やってきたのではないと思う。

(東村委員)

質問だが、新津美術館の教育普及事業の『H a m a 「こどもごはん写真展」』はすごくおいしそうなネーミングだが、具体的にどんな内容か。

それから意見として、先日、北方文化博物館へおひなさまの企画展の初日の前日に行ったが、おひなさまを出して飾る姿を見せる見学会をやっていた。作品が箱の中から出てきてショーケースの中に入るところを見るのは初めてで、興味深かった。美術館でも、「展示室をつくる」ということを展覧会の前に見学会として見せることは可能なのか。可能ならやったら楽しいのではないか。

それから、新潟市美術館では市展が、新津美術館では区展がある。新津の区展は公民館事業で担当が違うからか、新津美術館はあまりPRをしていないようだが、そのような枠は取り払い、新津美術館の魅力の一つとして、区展を利用してどんどんアピールをすることも大事である。

また、新津美術館で下越美術教育研究会主催の「新潟教育アート展」が開催されている。子どもたちの豊かな感性の作品がたくさん並び、普段なかなか美術館に足を運べないママさんパパさんたちが、子どもの作品を見に行く。新しい美術館のファンを作るよいきっかけになるので、ぜひ続けてもらいたい。作品が飾られた子どもたちがすごく誇らしげにしているという話も聞いたことがあるので、ぜひそういう教育の点から見てももらいたい。

予算がない中でどうやって知恵を絞っていくか。地域力を活用して魅力ある美術館づくりというところで、視点を変えていってもいいのではないか。

(横山館長)

「こどもごはん展」のH a m aさんは新潟在住の写真家で、お母さんと子どもと一緒にご飯を食べている写真を多く撮っているが、たいへん評判で、撮ってほしい人が後を絶たないそうである。今回「ぼのぼの展」というファミリー向けの展覧会に合わせ、当館の市民ギャラリーで3週間、こどもごはんの写真飾ると同時に、まだ正式には決まっていないが、H a m aさんが来場した子どもたちとお母さんの写真を撮る企画ができないか検討している。美術館になかなか来ることのない方々、特にお母さんとお父さんと子どもたちに来ていただき楽しんでもらい、そしてH a m aさんの写真も見てもらおう企画である。

(東村委員)

そのHamaさんであれば知っている。ママさんたちにも人気だ。秋葉区自体が今、移住、定住を含めて子育て世代をターゲットにしているので、新津美術館にはぴったりの企画展になる。しかも地元の方なので、新津美術館らしさのある素敵な企画展になることを期待する。

(中山会長)

一回りしたので、私から申し上げる。

参考資料の新潟市美術館と新津美術館の運営方針について、もう少し重ならないか。例えば「何かが見つかる」と「発見する美術館」、また「つながる美術館」と「みんなで歩む美術館」も似ているので、もう少し検討したものができてよいかと感じる。

それから、私は何もテーマのない常設展に行くのが好きで、むしろテーマをつけないで、館長でも学芸員でも好きなものをどんどん並べたほうがいいのではないかと思う。作品がすごくたくさんあればいいが、テーマがこじつけみたいになってしまう。その辺のところをもうひと工夫あってもいい。

阿部展也については、こんなすごい人はいないと思う。私は、ここに放送会社が寄託している阿部展也の作品を借りて3回ぐらい展覧会をやっているが、プロというか好きな人には人気がある。ずっと前に東京のステーションギャラリーでもやっている。新潟県が生んだ本当に希少価値のある作家だと思うので、もっともっと売り出してよいかと思うし、阿部展也展に本当に期待している。いろいろな入館者と話すと、特にイタリアに行ってからの、イタリアをテーマにした作品に惹かれるようだ。

企画展は1つ減らしたということだが、内容は非常によいと思う。ぼのぼの原画展については、これは絵を見ればみんな、作家を知らなくても分かると思う。新津美術館ではヒットするのではないか。

今までの皆さんの発言について、両館長よりどうぞ。

(塩田館長)

ご批判も含め、いろいろなご意見を頂戴しありがとうございます。厳しい状況ではあるが、何とか工夫しながら、両館とも頑張っていきたい。

(横山館長)

郷土作家について、新津美術館では8区の隠れた名品展という展覧会をやってきたが、来年度はやらない。8区のうちまだ3区残っているので、また予算がつけば継続してやっていきたい。

(中野部長)

何とか予算を確保できるように努めていきたい。

(中山会長)

よろしく願います。

両館の30年度の事業計画については終わりとし、せっかくの機会なので、両館の運営などについてご意見があれば発言していただきたい。

(福永委員)

常設展のテーマについて。当館もテーマを決めて常設展をやっていたが、何かしっくりこない、わがコレクションがちゃんと紹介されているのかという疑問があったので、1年ほど前から2本立てにして、半分は当館コレクションのメインの作品、もう半分はテーマでやっている。だから、メインの作品を出す機会をたくさんつくることで、少し工夫はできるのではないか。今日も常設展を見たが、非常に上手にコレクションを使っている。いい作品を持っている、しかも視点がすごくいいと感じる。

(中山会長)

常設展に見たいものが出ているとほっとする。

(金山委員)

カビ・クモの事件があり、その後、新たに塩田館長の下でスタートした。コレクションをどう活かしていくかは、委員会でもいろいろ議論があった。私の認識だと、以前の新潟市美術館の常設展は、テーマを設けた展示ではなかったと思うが。

(松沢課長補佐)

テーマを設けるというよりも、90年代にピカソやマグリットといった高額の作品を集中して購入したが、そういう作品をいつでも見られるようにというトレンドがかつてあった。それで、展示替えはそれほど頻繁にせず、お金をかけて買い集めた作品をいつ来ても見れるコーナーを設けていた。

(金山委員)

買った作品は新収蔵作品展示のような形で、比較的長期で常設展で展示していた。それが再スタートしたとき、コレクションを少しでも常設展で活かしていくという話があり、テーマを設けてやってきた経緯がある。会長や福永委員の意見ももっともだと思うので、常設展のあり方を見直す一つの契機かもしれない。

(中山会長)

2本立てでもいいと。

(金山委員)

そうですね。

それから、市の財政が厳しい状況であり、予算が減って、5本やっていた展覧会が4本になったということだが、私は5本やらなきゃならないということでもないと思う。学芸員は展覧会をやることだけが仕事じゃない。実は展覧会以外にもいろいろな仕事がある。例えばコレクションの管理や、調査研究や、年報や紀要を出すための論文も書かなければならない。そういういろいろな仕事のうちの一部が展覧会なのだが、実際はどこも展覧会の本数が増えていて、学芸員が展覧会に忙殺されている現状がある。

ですから、5本を4本にしたら、それをまた5本に増やすという意見も美術館の方にはあるかもしれないが、むしろ学芸員としての他の業務の方に専念していく、そこから振り向ける契機にもなるのではないか。もちろん予算が確保できれば、展覧会の質を上げることができ、場を広げた活動がいろいろできるというのは分かるが、予算はできるだけキープしながら、学芸員の仕事の配分も考えていただきたい。

(大倉委員)

最近の常設展はとてもいい。やはりテーマを設けたことで、学芸員が自分のテーマに沿って、コレクションを自分の観点で見てセレクトして組み合わせるという体験をやってきて、それが会長のように作品を見たい方にはもしかしたら不満かもしれないが、私は学芸員だったことがあるので、学芸員の試行錯誤がよく見えて、とても面白く見ている。そういう点で、テーマに沿って作られてきたという一つの大事な成果として、私たちも認めていいのではないかと思う。

一方で、テーマに沿って並べるので、出ない作品もあるというのはときどき気になっている。今後は、福永委員や会長がおっしゃったような、テーマにとらわれない展示も混ぜながらテーマの展示もする複合的な形で、場合によっては部分的に展示替えるのも面白いと思う。新潟市美術館は版画のコレクションがたくさんあるので、版画のコーナーは2回か3回展示替えるのも、学芸員が忙しくなってしまうが、あってもよいと思う。

新潟市美術館の常設展示室で、私が非常に問題があると感じるのは、床に表情がありすぎて、作品よりも床が目立ってしまうところだ。今回はうまく床の表情を殺して、ライティングなどもよく考えていて、常設展示室の空間に対して学芸員が大変工夫しているところがとてもよい。

もう一つ、地元の作家の話があったが、予算がないがゆえに、逆に地元の方と交流してはどうか。作家を選ぶのはかなり大変だが、テーマを設けて、地元の現役の作家

や物故の作家を取り上げる展示もあってもいいとかねがね思っていた。新津美術館の「隠れた名品展」もその一つの切り口だが、もう少し学芸員の工夫のあるテーマで地元の作家たちを紹介するのは、それほど予算がかからずできるのではないか。

(東村委員)

コレクション展で、展示回数の少ない作品展というのをやってみてはどうか。なかなか見られない、今まで眠っていたレア展みたいな。あまりよく分からない人たちが「へえ、面白いかも」「あまり展示されていないんだ、どんなものかな」と見たくなるのではないか。そういう素人感覚もたまに入れたほうがいいと思う。

(建島委員)

常設展示論というのはあまりない。MoMA（ニューヨーク近代美術館）やテート・モダンのようにものすごいお宝を持っているわけではないから、創意工夫でやるのだが、それも尽きてくると、外部のアーティストに頼んで常設展示をやってもらったり、あるいは子どもたちに選ばせたりとか、いろいろやっているが、私が見るかぎり成功した例が少ない。

それから、常設展をどのぐらいのスパンでやるのか。展示作品は変える必要があるが、いつまでも同じ作品だと学芸員は飽きるが、お客はそんなに飽きない。年に何回も来るお客もいるが、普通はそんなに来ないので、いつも同じ作品ばかり出していると言うのは学芸員であって、お客はそれほどでもないという気がする。その美術館の一番重要なお宝をなるべく常時見せるようにして、それだけだと限られてしまうから企画性を盛り込んでいくという二本立てに集約されているところだと思う。ところが国立国際美術館は、私が辞めた後だが、常設展示にもものすごく企画性を持ってきて、全館常設展ということをする。これはそれなりの作品がたくさんあるということもあるが、常設展なのに外部から作品を借りてくる。あまり輸送料がかからない範囲で。大阪だから近隣でそれなりの作品が借りられるということもあるが。それが企画展以上にインパクトがある。今までの、常設展示の中でテーマで何か面白いのを選ぶというのではなく、発想を変えて、企画展ほどではないが多少のお金を使って外部から借りてくる。お宝を見せ、同時にいろいろな作品をなるべく人目に触れるようにするという二本立ては基本だが、そうではない国際美術館方式も成功している。そういうことで、さっき「拡大コレクション」とあった「正誤表」について質問した。何か今までの常設展と違って面白かったので大賛成である。「正誤表」というタイトルもよく

分からないが、面白い。これがもう一つのコレクション展のあり様につながっていくと思う。

(東村委員)

先ほどの金山委員の、こういうときこそ学芸員さんの業務配分を考えてというのは、なるほどなと思った。新津美術館の学芸員で出産、育児を控えている人がいたと思う。ママであっても学芸員として活躍できるよう、今後ぜひ環境を整備してあげてほしい。

(塩田館長)

建島委員のご意見に関して。リニューアルオープンした直後のコレクション展では外部から作品を借りている。それは、この美術館を設計した前川國男の設計図や模型と、リニューアルのときにグラフィックデザイナーの服部一成さんにサイン計画を担当してもらいサインを一新したが、その服部さんの仕事を紹介するために作品を借りて、美術館の歴史をたどるということで、ヒストリーとかけて、「Hi, stories!」というコレクション展を企画したので紹介する。

(中山会長)

事務局でさらに検討していただきたい。以上をもちまして、本日の議事は終了する。

4 その他

退任予定の各委員から挨拶。

5 閉会挨拶

(塩田館長)

本日はいろいろご審議いただきありがとうございます。常設展のあり方、企画展、水と土の芸術祭との関係など、非常に率直なご意見を頂戴した。これを今後の活動に生かしていきたい。

私はこの3月末で新潟市美術館を退任する。ちょうど6年半勤めた。先ほども水と土の芸術祭、カビ・クモの話が出たが、そういう後遺症がある美術館で、それをどう修復していくかに始まり、開館30周年を期しての修復工事もあった。限られた中でラウンジNのような新しい試みもでき、少しずつ新しい方向に進んできたと思う。

非常に厳しい財政状況にある美術館を新しい館長に引き継ぐということで、申し訳けない気持ちもあるが、いい形で引き継ぎ、委員の皆さまには新潟市美術館と新津美術館をお支えいただきたい。ありがとうございました。